徳島ペンクラブ通信 第199号

2024年（令和6年）12月15日

発行

徳島ペンクラブ

１９６７年（昭和４２年）創刊

第25回とくしま随筆大賞表彰式

9月22日 於 県立文学書道館

とくしま随筆大賞

「大判焼きの味」

相原（あいはら） 真心（まこ） 様

徳島新聞社賞

「生ききるということ」

上野（うえの） 孝三（こうぞう） 様

第25回とくしま髄筆大賞の表彰式は、令和24年9月22日県立文学書道館にて行われました。受賞者は次の通りです。

とくしま随筆大賞　「大判焼きの味」　相原　真心　様

徳島新聞社賞　「いききるということ」　上野　孝三　様

優秀賞　「物語はつづく」　松尾　初夏　様

「玄界灘　露店の船旅」　藤居　光夫　様

「よれたカーテン」　静　春樹　様

奨励賞　「友達のふり」　趙　若杉　様

審査員特別賞　「死産児が世に貢献して九十余歳」　芝原　富士夫様

審査員

依岡　隆児　徳島ペンクラブ会長

柏木　康浩　徳島新聞社生活文化部記者

丁山　俊彦　徳島ペンクラブ顧問

竹内　菊世　飛行船主宰

今回の総投稿数は52篇で、コロナ禍末期の昨年並みでした。あまりの酷暑が多少とも影響したかも知れませんが、今後増々投稿者が増え、新たな投稿者も奮って参加され、この賞を契機に文学を志す人々が、次々と羽ばたくことを念じて止みません。

表彰式の依岡隆児会長

今回から新しく審査員特別賞が設けられました。大賞等の審査基準とは別に、ユニークさにあふれた作品を顕彰することになりました。また今回初めて海外留学生の方が受賞されたことも、とくしま随筆大賞の新たな動きとして特筆されます。

さらに、これまで徳島随筆大賞受賞作品は、大賞と徳島新聞社賞（以前は準大賞の名称）の2つの作品のみが、その年の徳島ペンクラブ機関紙「徳島ペンクラブ選集」に、その書評と共に掲載されておりましたが、「他の入選作品もぜひ鑑賞したい」との御要望に応えて、本年度発行のペンクラブ選集PART 42から、他の受賞作品をも掲載することになりました。よろしくご期待くださり、お楽しみください。

依岡会長と受賞者の皆様

第26回県民文化祭分野別プログラム

講演会「読書のすすめ」　11月16日　於　県立文学書道館

本年で26回を迎えました県民文化祭分野別プログラムには、徳島ペンクラブでは、「読書」をテーマに取り上げました。近年、活字離れの危機が叫ばれ、中でも読書が疎かにされております。それは出版物の減少、書店の閉鎖となって如実に表面化しております。スマホや電子機器類で言葉を伝達・記録するだけで、正しく文化を維持伝承できるでしょうか。文化を貯蔵できるでしょうか。

長年講演、書籍などを通して、またいろいろな機会に読書の大切さを説き、読書の振興に多大な尽力をされてこられた徳島大学総合科学部教授、そしてまた徳島ペンクラブ会長でもあります依岡隆児氏と、本県生まれで高知県育ちの新進気鋭の文芸評論家としてご活躍の三宅香帆氏を本講演会にお招きし、「読書のすすめ」講演会を催しました。

依岡会長は、「読書」の機運が盛り上がらない理由をいろいろな方面から分析し、それに対する読書の奨励策を考えられ、三宅氏は、近年、読書を必要情報獲得だけの狭い目的に絞られがちであると分析されて、本来の読書との齟齬を指摘されました。

当日、講演会と並行して「私のおすすめの一冊」と題し、本県の著名な教育者、文化人の方々と、本ペンクラブ会員の有志の方々に、ご自身が受けた感銘から、人々にぜひお勧めしたい書物を紹介して頂き、それをパネルにして同会場に展示致しました。

当日81名の方が参加され、秋本番の気候のもとで、熱の籠った雰囲気の中、有意義な2時間を熱心に聴講されました。

「私のおすすめの一冊ポスター展示

依岡会長　講演

三宅　香帆様　講演講

受賞おめでとうございます。

このたび、つぎの方々が文芸におけるコンクールで、目出度く御授章なさました。同じ文学同人として誇らしくまた励みになります。今後増々のご活躍を期待しますとともに、各文芸分野でも秀でた成果を上げられますようお祈り申し上げます。

第24回モラエス忌　俳句大会　特選　　松尾　初夏
第1回「ふるさとを詠う！佐藤恵子賞」　優秀賞　　松尾　初夏
第9回「阿波の歴史小説　読書感想文」　優秀賞　　松尾　初夏
第24回　海音寺潮五郎記念「銀杏文芸賞」優秀賞　　渡辺　恵子

（お報せ）随筆の書き方講座を行います。

何の形式も制約も求められない文芸は散文であり、中でも随筆はその名が示すように随意に書きうる文章ですが、そのことが却って取りつきにくい点でもあり、やはり初めは戸惑うものです。そこで本会で初めて随筆の書き方の講座を開くことと致しました。初めての方はもちろん、熟練の方も自分の手法を見直したり確認する意味で受講してみてください。

日時　令和7年3月29日（土）13時30分～15時30分
場所　県立文学書道館（徳島市中前川町2丁目22―1

新会員紹介

この度、当会にご入会された方を紹介します。ご活躍期待します。

鎌田正浩様　ジャンル　随筆

会員募集中

当会では、ペンクラブ会員を募集中です。入会希望の方は、本会会員の紹介によるかまたは、本会役員にその旨ご通知下さり、当会既定の入会希望書に必要事項をご記入の上ご提出ください。入会の期日はありません。

サテライト独りごと欄

私の知床旅情

二橋滿璃

もう六十年も前になるだろうか。女四人づれの北海道旅行、宿はユースホステル、もっぱら鈍行で札幌から知床まで斜めによぎる一週間の旅であった。三日目に知床遊覧をするべくウトロ港に到着。

夏とはいえ、時折小雨も降り寒かった。出航まで一時間余り待機する。耳を澄ますと繰り返し流れている曲があった。最果ての地に来たと言う旅情をかきたてるに十分で、忽ちその歌の虜になった。切符売り場にあったカラー印刷の楽譜に「知床旅情」とあった。歌っているのは森繁久彌。

その後のユースホステルの夕食後のミーティングに楽譜を持っていき「誰かこの歌教えて」と言うと、アルバイトに来ていた学生さんがすぐさま反応し繰り返し歌ってくれた。ある時は汽車の中で、ある時は歩きながら仲間たちとこの歌を口ずさんだ。

帰宅後、誰も知らないこの歌に関心を示さず時の移るにつれて楽譜も行方不明、私も歌う事さえ忘れていた。

それから何年経ったのだろう、十年？二十年？　ある日突然ラジオからこの歌が流れてきた。歌っているのは加藤登紀子。驚くやら嬉しいやら！　再びこの歌を口ずさんでいる。

ワク
ワク ♪

秋の文学散歩

徳島新聞印刷センター探訪記

藍　人

待ちに待った徳島新聞印刷センター見学会当日の朝。運動会を明日に控えた子どもよろしく興奮して眠りの浅い目を瞬いていると妻に笑われた。取り敢えず妻を急かし朝食を終え、歯を磨き、顔を洗う。寝不足の目がすこし赤いのはご愛敬。

さて、当日の参加者は、依岡会長を始めペンクラブの役員及び会員諸氏並びにその令夫人、更に友人、知人など総勢二十二名。先着五十名までと銘打って募集していたのに意外と少ない参加者に驚いた。会長は「こんなもんでしょうと」達観されていたが、世話役の坂井監事は物足りなさを感じたのではと聊か申し訳ないような気もした。紙媒体が減少傾向にあることから、あまり新聞の印刷工程に関心がないのだろうか。物書きの端くれとしては何でも見てやろう、聞いてやろうの精神は大事だとワタクシは思うのである。

ともあれ、我々は、二〇一九年に完成した印刷センター玄関前での記念撮影の後、センター一階のコミュニケーションホールに集められたが、どうやらこの時点で徳島新聞社の謎の機関「徳島新聞特命課（ＴＰＭ）」の掌の中にあったらしい。

というのも印刷センターを紹介する映像を視聴中、いきなり画面が切り替り、特命課のミスターＴなる人物が現れ、

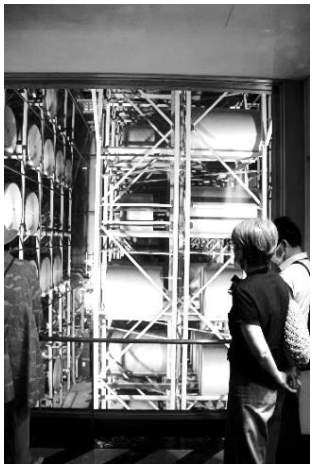
見学会が号外に!!

徳島ペンクラブメンバー（こちらも略称はＴＰＭであるから、特命課との親和性は高くすんなりと洗脳されたのかも知れない）二十二名は全員特命課の訓練生として登録されていることが明かされ、一人一人にストラップ付きのＩＤカードが手渡されたのだ。

ふふふ、それにしてもミスターＴだって？Ｔと言えば、チョコレートプラネットの「ＴＴ兄弟」を思い出して、あの「Ｔ、ＴＴ、ＴＴＴ～♪」のメロディーを口ずさむところだった。アブナイアブナイ。おまけにあのミスターＴの風貌、見るからに往年のアニメ「タイガーマスク」に登場する虎の穴の極東地区担当マネージャー・ミスターＸにクリソツ、いや、そっくり。果たして、我々に何をさせようというのだろうか。

特命課訓練生、何やら妖しい響きである。訓練生の資質を見極めるためか、全十問のクイズが出される。次々と脱落していく中、全問正解を出したのが東條理事ただ一人である。特命課から表彰状を手渡されたが、果たして、単なる表彰状に過ぎなかったのだろうか。ひょっとしてあぶり出し文字で秘密のミッションが指示されていたのではないか、と今も思っている。

新聞紙端切れでメモ帳製作



立体自動倉庫に保管された
ロール状新聞用紙

その後、二十二名は十一名ずつの二班に分けられスタッフの先導でセンター地下の免震構造（震度六強の地震にも耐えられる）を見学、一階に戻り活字組版が行われていた頃の鉛活字やピンセット、十八キロもある鉛版、小組み、組み付けなどの作業工程の解説、そしていよいよ最新式の工程見学へと進む。巨大な立体紙庫、三種類の巻き取り紙、第九のメロディーとともに巻き取り紙を自動で運搬・セットするＡＧＶシステム、紙面データで刷版を作成する製版、新聞を印刷する高さ十三メートル余の輪転機、新聞を搬送するキャリアー、部数を計測し新聞を販売店名毎に梱包、発送ゲートから出荷、とこれが大雑把な一連の工程となる。

見学以外にも本日は二つのワークショップが準備されていた、一つは本日のように輪転機が稼働していない際のＶＲ体験（ヘッドセット）である。これには老若とも喫驚間違いなし、太鼓判である。二つは白損紙を使用したオリジナルメモ帳作りである。ぶきっちょなワタクシでも楽しく作業できた時間であった。

こうして二時間の見学は無事終了、特命課手帳（少年探偵団手帳を思い出す）、特命課鉛筆、オリジナルメモ帳、そして記念撮影をした写真が掲載された徳島新聞号外を記念品として頂いた。

そうそう、忘れてはならないのがストラップ付きのＩＤカードである。これも記念品として頂いたのだが、これにはＱＲコードがあり、これを読み取りカード裏面のパスコードを入力すれば…さあ、どうなる、どうなる。

いや、どうする、どうする。

新聞紙給装から印刷、折り畳み整合まで連続全自動の輪転機の前で説明を聞く☞

リレーエッセイ

【苦悩の意味】
嫌でも頂かねばならなくなっていること

鎌田正浩

私は、現在71歳であるが、自らの夢をかなえて人生の絶頂期だと思っていた51歳の時に突然苦悩の深淵に引き込まれた。以来折につけ反芻してきたのが、学生時代に出会った話だった。

―私が小坊主のとき、檀家を訪れたら、赤ん坊が廊下でおしっこを漏らしていた。そこに落ちていたしゃもじが、流れていったおしっこにぬれた。気づかないおばあさんが、それでご飯をよそってくれた。なんとかその場はそれを食べずに切り抜けた。数日後再び訪れると、甘酒をごちそうしてくれた。おばあさんは嬉しそうに言った。「ちっともあがってくれなかったあのご飯、甘酒に仕込んだらこんなにあがってくれて―」人生、いただかなければならないものは、どうしてもいただかなければならなくなっているものなんだなあ。―

大学生の私は、この人生観を適応主義的な宿命論として片づけていた。そして、クリスチャンサイエンスの教えに共鳴して、幸せな人生のイメージを鋳型として超越者の前に差し出して32年間に亘って真剣に祈ってきた。しかし、その鋳型に注がれたのは、如何とも克服しがたい艱難であった。それ以来、狂気の深淵に陥りそうになりながら、この生における克服しがたい艱難の意味を問い続けることになった―。

現在の地平で確言できることは、頂かなければならない苦悩や試練をなんとか避けることができたとしたなら、私は幸せであったであろうが、その魂は傲慢になっただけであるし、神秘の扉は開かれなかった、ということである。翻って思うに、私たちの魂は、とめどなく空を漂う一粒の水滴である。それは神秘が与えてくれる重い苦悩をいつか頂かねばならない。もし渾身の力でもってそれを抱きしめるならば、それは瀑布の中に落ちてゆく。激流に身を任せているとやがて流れは緩やかになり、ついには煌めく神秘の大海に帰還してゆくのではないだろうか？

ひとりごと欄

書けない身体

吉兼　剛

長文が書けない身体、なってしまった。つくづくそう思う。

インターネットが流行る前、パソコン通信の時代から、エッセイやコラムを書いている。書き始めたのが25歳なので、もう30年。当会で30年は、新人に分類されるが、私のなかでは、ずいぶん長い間書いている。そんな気分。

インターネットの秘訣は、短文で簡潔にまとめること。長文は読んでくれない。なので、テンポや語呂を考えながら、文章にリズム感を出している。読点が多いのが、我流だったりする。

ところで、いろんな文学賞に応募をしたいが、どれも規定は原稿用紙5枚。これが、最大のネックとなっている。書きたいけど書けない。どうしたものか。だが、克服しなければ。

長文が書けない身体、なってしまった。かなりの筋トレが必要かも・・・

鳶の恩返し

東條　孝

物語は火の国、天草から始まる。老春とは何かを求め、愛車ハイエースの助手席に座り自宅を出発した。数日後に崎津集落に到着した。隠れキリシタンの歴史が今も息づいている港町である。漁師たちは，漁の行きかえりに岩場に立つマリア像に祈りを捧げている。マリア像と海に沈む美しい夕日を見ようと，町を散歩していると，コンクリートで山肌を塗りつぶし，さらに太いネットが一面に張られている。突然，バサバサと大きな音が耳にはいってきた。イノシシかとビクッとしたが，よく見ると，一羽の鳶であった。大きな羽を広げ必死に飛び立とうとしている。しかし，狭くて羽を痛めてばかりである。その様子を心配そうに眺めている一匹の猫がいる。翁は漁港の隅にあった長い竹の先にメザシを括り付け，ネットが張られてない林の方への誘導を試みた。鳶は上空から，下界の人間が食べている弁当を狙ってくるほどの能力がある。この鳶はその余裕がなく，誘導はうまくいかなかった。天草は離島で，消防隊は本渡市にしかなく，救援隊の到着は絶望的であった。翁は，マリア像に祈り，沈む夕日を見ながら，鳶の様子を見守った。疲れ切った様子で安定した枯葉の上でじっとしている鳶に，「がんばれよ，入れたのだから，きっと出られる」と声をかけて，車に戻り夜を明かした。翌朝，心配のあまり駆け付けたところ，鳶はネットの中にいなかった。「あ・あ・あ・そうか脱出できたのだ」と安堵した。心配していた猫も近くの木に登っていた。猫は，脱出の一部始終を見ていたのかもしれない・・・・。翁は，心置きなく愛車に戻り出発しようとした。その時である。一羽の鳶がハイエースの上空から舞い降りてきたのである。さらに，四羽に増えた。翁は，ピーヒョロロと大声で，「お前だったのか，昨日の鳶は。助かってよかったなぁ」と叫んだ。かつて救出された「崖っぷちの犬」や「鶴の恩返し」が澄みきった青い空に浮かぶのだった。

今号の「ほんの散歩道」は休みます

今期は、書籍発行の連絡がありませんので、当欄はお休みいたします。

あとがき

鏡という字は金偏で、「拭く」というよりも「磨く」と言葉を続けるのが自然な感じがするのは、鏡が本来金属即ち青銅でできていたからで、ガラスと異なり磨かねば何も映らない。よく磨くほどよく映る。読書をこれと同じ伝で以って考えれば、その効用が分かりやすい。読書とは、先人・他人が残した鋭く強靭な思考の集約である書で以って、自分つまり自分の知性を磨くことであり、良書を多く読むほどに自分が開けてくる。磨かれてくる。そして光ってくる。鏡となって正しく物事を映すようにもなる。時には世の中を明るく照らして世に貢献できる。良書は人を磨く金剛砂である。

（粟）